
機械魔術の楔人

松村ミサト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機械魔術の楔人

【Nコード】

N3643X

【作者名】

松村ミサト

【あらすじ】

一千年前、世界は神に見限られたことにより文明を奪われた。

そのとき、人々は残っていた文明を掛け合わせ、『機械魔術』を生み出し、神 『悟神族』の力の大半を封印することに成功する。

それから一千年後 戦いの影響で原初の姿に戻ってしまった世界で、力を取り戻さんとする『悟神族』と、人類の戦士『楔人』との戦いが続いていた。

プロローグ この世界の歴史

世界はこうして滅んだ

今からちようど一千年前

この世界は滅びた。

この世界に住まう人々は、神に見限られた。

かつて共存し、ともに世界を繁栄させてきた神が、まるでカードを裏返したように簡単に、あっさりと人々を見限った。

神は自分達を『ごしんぞく悟神族』と名乗り、自分以外の存在、『ヒュマニウス人間族』ダイモニウス『ダイモニウス魔族』を見限り、彼らからあるものを奪った。

それは『文明』。

生きとし生けるもの全てが、莫大な時と労力　そして生命を懸けて積み上げてきたものを、エソジエリウス『エソジエリウス天使族』の大半を奪った。

その行為を口火に、彼らの配下であったはずの『エソジエリウス天使族』の大半が反旗を翻して地上の者達に味方し、後に『しんめつたいせん神滅大戦』と呼ばれる戦争の引き金となった。

この時、すでに人間族と魔族は自分達の主力となる文明、『ヒュマニウス科学文明』と『エンジェリウス魔術文明』の半分を奪われてしまっていた。

そこで、反旗を翻した天使族は自らの力を使い、人間族の『ヒュウマニウス科学文明』、そして魔族の『ダイモニウス魔術文明』の残ったものを結合させ、新たな力を作り出した。

それが

『デジタ・マギカ
機械魔術』

決して相容れぬはずだった科学と魔術の融合。
その新たなる力を持つて、今度は人々が神を見限り、長い戦いの
末、彼らの力の大半を封印することに成功した。

しかしその代償と言わんばかりに、文明を奪われたことと相成り、
地上は緑が生い茂る原初の姿へと変わり果て、人類も全種族合わせ
てもかつての人間族ヒュミニウス全人口の三分の一程度にしか満たなかった。

また、悟神族も滅んだわけではなく、人々の精神エネルギー、『
ソル・エナジー』を奪い失われた力を取り戻すために人々を襲い始
めた。

かくして人々は、この圧倒的ハンデを抱えたまま神の力を借りず
に、また新に文明を築き上げ復興の道を辿ることとなった。

そんな風に一度世界が終わってから、千年後

人々は緑を切り開き、僅かな人口ながら国を作り、安息の地を求
めて彷徨いながら、時折現れる悟神族と戦い続けている。

そして、そんな悟神族と戦う戦士を、人はこう呼んだ。

みんぐじん
楔人

、と。

明るい。

少女が毎朝眠りから目を覚ましたときに思う最初の感想はそれだ。

『もう朝なのか』みたいな睡眠に対しての執着とか、夢の内容がどうだったとか、少女はそんなことは思わない。ただ目を開けて、今まで真っ暗だった視界に光が差し込むことに素直な感想を抱くというライフスタイルを十六年間続けている。

少女が寝ている場所は、どこかの森の中だ。

壁も屋根も無い。ただ周りに生い茂った木々があり、ちょうど彼女の真上はぽっかりと穴が開いたように開けて、上がり始めた太陽の光が降り注がれていた。

少女は上体だけを起こし伸びをする。背骨と肩の骨がコキコキと快活な音を鳴らすその感覚がたまらなく気持ちいい。

そして勢いよく立ち上がると、そのまま走り出す。

前方の木々の隙間を縫うように走っていくと、すぐに開けた空間に出た。

そこは切り立った崖。その眼下には、小さく見えるコンクリートの固まり、街が見える。別に街自体は今の時代にとっては都市レベルの大きさだが、その周りに群生する自然の規模があまりにも大きすぎて小さく見えるのだ。

少女の目線からは、緑色の中に一滴の灰色を垂らしたようにその町が見える。

少女はその街をしばらく眺め、そして、小さく口元に笑みを作った。

そして少女はその街に向け、切り立つ崖から飛び降りていった。

キーンコーンカーンコーン

例に漏れずつまらない音のチャイムが鳴り響き、生徒達は雑談の続きをしながら席に着く。

「はい、私語は慎みなさい。出席取るから黙れジャリ共」

いつの間にか教壇に立っていた後半口の悪い教師に生徒達は特に驚きもせず、言われたとおりに口をつぐむ。

「飯仲尾」

「はい」

出席は続けられていき、最後の一人を確認した後、教師は出席簿をパタンと閉じた。

「さあ、みんな。今日もいい天気ね」

どこにでもある普通の学校風景。

「というわけで、今日は皆さんに殺し合いをやってもらいます」

ではなかった。

生徒はその言葉に特に驚きもしない。ただ冷ややかな空気を教師に対して発している。

「喜吉先生。いい加減実習日の朝っぱらからバトロフ宣言をするのはやめてください。『今日は』じゃなくて『今日も』ですよ。いい加減気が滅入ります」

そのうちの一人が拳手の後立ち上がって言った。しかし教師・喜吉世子は意に介さず、

「なーに言ってるの。この時代、学校でクソつまらない授業受けるよりもいかにして相手をぶっ殺せるかという技術を磨く方がよっぽど実用的なのよ。これはそのため気持ち奮起させる言葉なの。分かる？ 棗」

「全然分かりませんが、これ以上聞いても無駄そうなので着席します」

棗は無表情に淡々と語り、再び着席した。すると彼の隣の席のちよんまげのように後ろ髪を結った男子、蝶薙ちようなげアクエリアスが誰に言うでもなくポツリと、

「どうせまた男に振られたからだろ」

と言った。

一瞬、時間が止まったような錯覚を教室にいる全員が味わった。

ドカーンッ！！

そして、喜世子が教壇に盛大に頭を打ちつけた音で、その呪縛は解かれる。

「そーなんだよ、振られたんだよ・・・人生で99回目の失恋だよ・・・なんなんだよこれ・・・あたしゃ漫画のキャラかよ、笑えねえんだよ・・・」

何やら怨嗟の声をブツブツと漏らしている。

「ねえ！！ あたしのなにが悪いの！！」

いきなり頭がグリンツ！と生徒達の方に向く。若干ホラーなその光景に、さすがの生徒達も少し引いた。

「今日のH.Lホームルームの内容は、先生の男に振られる原因となる悪い点は何かをみんなで考えるわよ！」

H.Lの私的利用を高らかに宣言し、喜世子はやっと上体を教壇から起こす。

「はい、後ろの席から！」

「酒癖が悪い」

「がさつ」

「生活力が無い」

「胸が小さい」

後ろの席の丁度真ん中の男子生徒、日向糸祢ひゅうが いとねがそう言った瞬間、座っていた彼の腰にガツチリと腕が回される。そのまま一八〇度回転して後ろ側を向かされた。

糸祢が何かを言い終わる前に彼の身体が高速でブレ、そのまま教室の黒板に向かって放り投げられた。

ドゴーンッ!!

轟音が教室を超え、廊下にまで響き渡る。糸祢はそのまま地面に落下する。

彼が起き上がるうと身体を起こすと、その腰にまたガツチリと腕を回される。

「誰が

」

彼を黒板へと投げ飛ばした喜世子が、ニッコリと微笑んだまま熊でも逃げ出すようなドスの利いた声でそう言った。

「貧乳じゃガキヤコラー……!!」

そしてそのまま糸祢を後ろに向かって投げる。今度はホールドを外さず、喜世子の身体と共に綺麗なブリッジを描き、彼の頭は今度は教壇に叩きつけられた。

バリバリバリッ! ドゴーンッ!

喜世子が放った華麗なジャーマン・スープレックスで、教壇が真つ二つに割れ、脚をだらしなく開いた糸祢がぐったりとしていた。

「そして

」

まるでビデオの逆再生のように今までの軌跡を逆走した喜世子と糸祢。喜世子はもう力の入らない糸祢に何のためらいも無く再びジャーマンをかける。

「ドーンッ!!」

ドーンッ！！

一発目と同じ投げっ放しのジャーマンにより、糸祢の身体は教室の後ろの壁に高速で叩きつけられた。そのまま地面にドタンッと倒れると、ピクリとも動かなくなった。

そんな彼を、教室の生徒全員は敬礼をしながら見送ってやった。頭部で華麗なブリッジを描いていた喜世子は体勢を元に戻し、生徒達の方に向き直る。

「ふうー。先生スツキリ！」

ピッカピカの笑顔でそう言った。そのことに、生徒全員がツッコまなかった。

「さて、冗談はさておき」

生徒に対して三連続ジャーマン・スープレックスを決めたことを『冗談』と流すが、もちろん生徒は全員ツッコまない。

「今日は一時間目から四時間目までは体育の『せんいく戦育』よ。鉄鋼機構スチール・フレームを起動した後校庭に集合。いいわね」

そこで初めて、生徒達から『ええ〜〜！』というツッコミが入った。

「うっさい！ 黙れクソジャリ共！」

教壇が無いため自分の後ろにある黒板をバンッ！ と叩いて生徒達を黙らせる喜世子。

「学園の方針に文句言っな！ 分かったらさっさと校庭に行く！ 行かなきゃ一人ずつジャーマンで窓から送り出すわよ！」

言われて、生徒達は文句を垂らしながら教室を出て行く。動かない糸祢はクラスで一番小柄でクラスで一番の怪力を誇るアンナ・リーベンスの肩に担がれ運ばれていた。

しかし教室には一人だけ生徒が残っていた。

豪快に机に突っ伏しながら、グーグーといびきを立てている。顔の下にある机にはよだれで水溜りが出来ていた。さらに手にはエロ

本を持っているなど、もうやりたい放題だ。

喜世子はこめかみに血管を浮かび上がらせ、学校一の問題児の机の前にまで歩いていく。

そして、腹の底まで大きく息を吸うと、それを声にして盛大に吐き出した。

「起きなさい！ 神風かなまぎ森羅しんら！！」

呼ばれた男子生徒、シンラはビクリッ！ と身体を震わせ、ゆっくりと顔を上げた。

「……ん？」

その顔は余すところ無くよだれで汚れており、机との間に糸を引いている。

そしてその汚れきった顔で、森羅はニツコリと笑顔を作った。

「グツモーニン！ 喜世子センセツ！ あれあれ、何だかご機嫌斜めな顔だな。そうだ！ そういう時はパンツ見せてください！」

寝起き早々ウザいくらいにテンションが高い森羅の態度に、喜世子のこめかみに血管が一つプラスされた。

「君ね……まず言わせてもらおうと学校は居眠りをするところじゃないし私のご機嫌が斜めなのは君のその態度を見たからだしパンツを見せる気は無いし話の脈絡が無さ過ぎる。森羅、アンタいったい私の話どこまで聞いてた。もうみんな実習で校庭に

「先生……」

急に森羅が深刻な顔になったので、喜世子は口を閉じる。

そんな彼女に、森羅は持っていたエロ本をバツ！ と広げて見せて、

「これ！ よだれで写真濡っれ濡れでめっちゃくちやエロくね!？」

パリーンッ！

校庭で雑談をしたりウォームアップをしている生徒達の目に飛び込んできたのは、三階の自分達の教室の窓を割り、おそらくジャーマン・スープレックスで投げ出されたのであろう森羅の姿だった。

少女は走る。

生い茂る木々を避け、その速さをまるで変えず、ただひたすらに、街に向かって一直進に。

走る。

その顔に笑みを刻み、ただ走った。

「はい。全員集まったわね」

手をパンパンと叩きながら、喜世子は校庭に集まった全員の顔を見回す。

校庭と言っても、それはただの森の中だ。学園は一応国際機関であるため、土地を大量に保有しており、ここもそのうちの一つ。一般的な運動ではなく戦闘訓練を行うための実習場だ。

彼女は自分の専用武装『^{デバイス}デイベイブ・コンダクター』を背負い直し、空中に電子画面を投影させる。

「今日の授業はこれ。単独での戦闘実習。ルールは簡単。ただお互いの本気を出して潰しあうだけ。全員ぶっ倒すまで四時間ぶっ通しです」

その言葉に再び生徒が『ええ〜』と声を上げる。

「なに、不服？ そうねえ・・・じゃあ、こうしましょう。今日は特別に先生が相手してあげる。ここでルール変更。先生をぶっ倒すか自分以外の全員をぶっ倒したら今日の授業は終わり。五時間目と

六時間目も校長脅して無しにしてやるわ！」

その言葉に生徒達は『おお〜〜！』と歡喜の声を上げた。

「ただし！！！」

と、その声に喜世子が割り込む。

「四時間経つても決着が付かなかった場合は、午後の授業で全員の名前を恋人っぽいアダ名で呼びます」

嗚咽を漏らすものもいるほどのその恐怖の罰ゲーム宣言に生徒達から大ブーイングが上がる。しかし喜世子はそれらを華麗に無視した。

「それじゃ、各自鉄鋼機構スチール・フレームは展開したわね。リョーヘイ。マキ。あんな達は本気出したらダメだからね。はい、これ。模擬戦用の制御チップ」

そう言つて喜世子は一八〇センチの大男、神楽リョーヘイと、地面に付くほどの長い黒髪の少女、マキ・シュナイテッドにチップを渡した。

「分あつてますよ、センセツ。カードも五枚までですよ」

リョーヘイは自分が背負っていた超長距離砲撃武装デバイス『メントモリ』にチップを挿入する。マキも無言のまま、自分の近接戦闘刀剣武装デバイス『ミカギリ』にチップを挿入する。

それを確認してから、喜世子は首を押さえてあくびしている森羅に向かつて、

「森羅、あんたも加減しなさいよ。最大でも『橙』までだからね」

「分かつてるよ先生。分かつたからパンツ下さい」

「もう一発ジャーマン喰らう？」

「ブラを貰えるなら喜んで！」

「畜生っ！ 逃げ場が無い！」

森羅への説教は無駄なので諦め、喜世子は生徒達に向き直る。

「じゃ、分かつてると思うけど一応言つとくね。鉄鋼機構スチール・フレームは確かに強力だけど、人体の急所に合わせた部分は非常に防御は薄くなつてるわ。だからそこを狙ったら比較的早く相手をぶつ倒せるわ。狙う

べきは頭部、心臓、肝臓、股間^{タマ}。相手の命取る急所はこの四つね。あつ、でも女はタマ無いからな。そもそもタマって潰されてもタマが直接取れることはないし、タマを取るための部分にタマは入らないのかな？ でも一応急所だしタマもタマ取るための部分に入れといたほうがいいのかな」

「先生。後半からタマがどちらを指しているのかまるで分かりません」

「あー、もう考えるの面倒くさい！ さっさと散開！ 一分後に開始よ！」

喜世子がヒステリック気味に叫んだため、全員が蜘蛛の子を散らすように森の中へと消えていった。

「さて……。どうすつかね」

実習が開始されてから三分。リヨーヘイは森の中を当ても無くぶらぶらと散策していた。

ただ今彼がいる場所は『森エリアC-9』。スタート位置である『森エリアE-1』から六百メートルほど離れた地点だ。

授業終了条件が教師の喜世子一人倒すこととクラスのメンバーを倒すこと。普通に考えれば前者だが、それはかなり難しい。学園の教師の強さはまさしく人外レベルだ。下手をすればクラス全員を相手にする以上の労力を費やしても勝てるかどうかは怪しい。

だから彼は今、そのどちらとも言えない条件同志を天秤にかけていたところだった。

そこに、

「リヨーヘイ……。リヨーヘイ……」

小声で誰かが自分の名前を呼んでいることに気付く。リヨーヘイは警戒し、背負っていたメメントモリを構えた。

「待て待て。俺だ、俺」

「！ 森羅」

そこにいたのはいつものヘラヘラした笑いを浮かべた森羅と、
「クラスのみんな・・・？」

その森羅の後ろには、他のクラスメイト十三名が大挙していた。

「どうしたんだぞろぞろと・・・」

リョーヘイはメメントモリを下ろし、森羅のほうに歩み寄っていき。

「いや何。手っ取り早く授業終わらせちゃおうと思ってね。早く帰って通販で買った同人誌読み漁って悶えまくりたいからさ」

「何か策があるのか・・・」

「簡単だっつもの。人海戦術で攻め込めばいいわけだよ。いくら喜世子センセが強くて、俺ら十五人丸ごと相手にすんのなんか不可能にも程があるって。そっちの方がよっぽど賢明だと思わね？」

すらすらと、ヘラヘラ顔を崩さないまま真剣な話をする森羅。

その話のリョーヘイはふむ・・・と考え込む。しかしそれもすぐのことで、物の数秒立たないうちに、

「分かった。その話のつた」

「だろー？ そうこなくつちゃ！」

森羅はリョーヘイの肩をポンポンと叩き、そして他のメンバーに向き直った。

「ということ、クラス全員の協力は求められたわけだ。まあ、作戦なんて言っただけ、ぶつちゃけ詳しいこととか考えてないんで。

ただ各々が全力で喜世子先生のおっぱいと下着を狙って突っ込んでいくっていう至極ストレートな作戦だ」

「本当に欲望にストレートな奴だなお前は」

「いやあ、実に青春だねえって感じだよ」

「教師の下着と身体が目的の青春なんて御免こうむるね。まあ後半はともかく、各々全力でつてのは気に入った。そういうやり方は嫌いじゃねえ。いくぜ、みんな」

リョーヘイの言葉に『おおー！』と全員が返事を返し、前進して

いく。

号令をかけたリョーヘイを先頭に進んでいったため、森羅は最後に付いていく。

森羅はヘラヘラしたまま、両手の拳を胸の前で合わせた。

その手には奇妙な文字が描かれた手甲と、同じく奇妙な文字が描かれた包帯が手首から肘までを覆っている。

森羅は胸の前に合わせた拳を上下に強く擦り合わせると、手甲の部分がカツカツ！と快活な音を響かせる。

それを合図にしたように、彼の手甲と包帯の文字が赤い光を発する。

次の瞬間にはそれは光ではなく、燃え盛る赤い炎へと変貌していた。

ヘラヘラ顔をニヤーと歪ませると、森羅は大きく炎を纏った拳を振り上げ、

「せきえん赤炎！！」

ドゴーンッ！！

自分の前方のクラスメイト達のいる地面に向かって思い切り叩きつけた。

何のためらいも無く。

轟音が鳴り響き、爆煙が視界を覆う。

しばらくは微動だにしていなかったが、微かに聞こえるキィィイン・・・という高い音と同時に、森羅の前方の煙を吹き飛ばし、白い閃光が飛来してきた。

彼はその光を炎を纏った拳で思い切り横合いから殴りつけると、光は方向を変え、森羅の隣を通り過ぎて彼の遙か後方に着弾する。

その衝撃で、あたり一面を覆っていた煙が晴れる。

辺りは森羅を中心に半径二十メートルの木々は台風の直撃を喰らったように薙ぎ倒され、発生源である森羅も周りのものは焼け焦げていた。

そしてその薙ぎ倒された木々の中に、彼に向かって白い閃光を放ったリョーヘイが立っていた。その手にはメメントモリが砲撃モードで展開されている。その砲身から、白い煙がゆらゆらと上がっていた。

そしてそのリョーヘイを中心に、クラスメイト十三人が立ち塞がるようにして立っていた。その手には全員、武装を展開している。

「あっちゃー。いい作戦だと思ったのになあー」

森羅は頭をかきながら残念そうに呟く。

「バーカ。お前の考えてることなんかすぐに分かったよ」

リョーヘイは明るくそういうが、目は少しも笑っていない、完全に戦闘にスイッチが切り替わってしまったている。

「まずお前が先生相手と戦って勝つなんていう面倒くさいことするわけねえし、人海戦術なんて泥臭くて面倒くさいことをするわけがねえ。だったら俺たちを集めて一網打尽にする。この作戦が一番面倒くさくねえ。だからお前はこうすると思ったよ」

「あらら。ずいぶんひねくれ者だと思われてんのね、俺」

「安心しろ。ある意味では信頼してるんだ。嫌われ者って訳じゃない」

ニツ、と唇を歪める森羅に倣って、リョーヘイも唇を歪める。

そして、

「逃げるーーーーー!!」

リョーヘイのその一言で、クラスの全員が一目散に逃げ出した。

「あ、おい！ 行っちゃうのかよ!？」

すでに構えを解いて全神経を走ることに使っているリョーヘイに

向かって声をかける。

「当たり前だ。お前とやりあうんじゃ、俺たちはハンデがでかすぎる！ 協力できないんなら戦わず逃げるだけだ！」

そう言うのと、もうリョーヘイどころかクラス的全員の姿は見えなくなっていた。

『心配すんな。俺たちだけでも何とかやってやるよー！』

という声が最後に聞こえた後、全ての気配が消え、そこには森羅だけがポツンと立っているだけだった。

「・・・あーあ」

森羅は両手に付けた魔道具『コウテン』チャージャーをカチカチと鳴らして、

その場にへたり込むようにしゃがんだ。

「なんだよ・・・俺だけハブかよ・・・」

一人でブチブチと文句を垂れていた森羅はしばらく地面におっぱいの絵を描いていたが、それを一〇八個 所要時間七十秒

描いたところで、スクツと立ち上がり、

「よし！ 先生も含めて、今日はクラスの女子全員の下着を取ろう！」

一人馬鹿な宣言をした後、みんなを追って走り出した。

「良かった？ あれで」

森羅を振り切った後、マキはたまたま逃げた『森エリアA-3』で合流したりリョーヘイに質問した。

彼女の一般会話は、大抵このおかしな倒置法で行われる。

「ん？ ああ。あいつはああ見えて寂しがりやだからな。ハブにしたらと思わせられりゃ、自分から仲間になりに来るさ。さすがに先生相手に俺たちだけじゃ戦力的に足りなさ過ぎる」

「してくれなかつたら？ 協力」

「そんなときや まっ、俺たちが何とかすりゃいいさ」

「リョーヘイ。そうだね」

「返しなさい！ この卑怯者！」

「なんとも言え！ 俺にはやり遂げなければならないことがあるんだ！」

『森エリアH-2』に、十百千羽撃とせせと森羅はばたきの声が響いた。

「羽撃。最後通牒だ。これを台無しにされたくなけりゃ、おとなしく今つけている下着を差し出せ。おっと！ 時間をかけちゃダメだぜ。脱ぎたてホヤホヤじゃなけりゃな」

「そんなの嫌に決まってるでしょうが！」

羽撃は着ている巫女装束の長い袖とともに腕をぶんぶん振って、拒絶の意思を必死に表している。

「大体、なんで下着なんか取るのよ。あんたの変態に付き合ってるほど暇じゃないの。いまエル君から連絡入って、先生のとこに行かなきゃいけないのに」

「俺の行動が変態だと！？ 馬鹿を言うな！ 俺の行動は生物の雄にとつては至極当然のこと！ 女子のパンツを被るのは雄として生まれたからには必ず通らなきゃならない道なんだよ！ それを否定する貴様こそ変態だ！」

「なんでよ！」

「変態とは人とは違う性的趣向を持つていることだ。だったら男としてのこの性への探究心が理解できん貴様は変態 まてよ。

男にしか理解できないなら、つまりは男から見れば女は全員変態・

・！？ だとしたら女から見た男もまた変態・・・！！？ やつた

！！！！ みんな変態だ！！！！ 世の中変態だ！！！！ 変態の

バラダイス
樂園だ！！！！！！

「ダメだっ！ 完全に頭に蛆うごが沸わいてる状態だわ！ エル君！？
エル君！！」

羽撃は空中に電子画面を展開し、この戦闘で参謀を買って出たエル君こと、エルⅡエルに連絡を入れた。

『どうしたの、羽撃？』

「大変よ！ いま森羅と接触したんだけど、あいつハブにされたときのショックで変なスイッチが入っちゃってるみたい！」

『変なスイッチ？』

「女子の全員の下着を取って被ったあと、それで自分の服を作ってパリコレに出すって！」

『何をどうすれば仲間外れにただけでそんな考えに辿り着くの！
？ テンションの具合はどう？ 出来るならその考えを正させて作戦に加わってもらわないと』

「無理よ！」

『どうして？ まさか、もう手出しできないほどのテンションに・・・！？』

「違うわ！ 私の四つある早弁のうち、一番大好きな幕の内弁当を人質に取られてるの！！」

『自分で何とかして』

急に冷たくなったエルに、羽撃は慌てて、

「ま、待って！！ わたしいつたいどうすれば・・・」

『弁当と下着、どっち取られたい？』

「そんなもの天秤にかけられるわけ無いでしょ！！」

『健闘を祈る』

ブツツ！！ と。そこで通信は乱暴に切られた。

「待って！ 待ってエル君！ この変態と片時でも二人きりだと思わせないで！」

何度か通信を試みるが、エルの方は完全に着信拒否チャットキヨ状態だった。

「さあ、どうする羽撃！ このままじゃ、この幕の内弁当の塩鮭が大変なことになるぜ」

羽撃はおろおろしながら電子画面と森羅を交互に見て、やがて、決心したように。

「わ・・・分かった・・・下、だけで・・・いい・・・？」

いやに艶なまめかしく訊いてくる羽撃に森羅は首が取れそうなほど大きく首を縦に振った。

そして、羽撃は自分の巫女装束のいやに短いミニスカートの中に手をいれ、そこからスルスルと布を下ろしていく。

「っ
！！」

森羅は歓喜のあまり声にならない歓声を上げる。

「こ・・・これでいいでしょ・・・」

恥ずかしそうに、羽撃は手に持った縞模様の丸めた布を見せ付ける。

「早く、早弁そひを返して。ここに置いておくから・・・」

羽撃は地面に丸めた布切れを置くと、一步、そこから下がった。

そして、森羅は何かを悟ったような清々しい顔になっていた。

「ありがとう、羽撃。本当に ありがとう」

森羅はその場に屈みこみ、手に持っていた弁当の包みを地面において滑らせ、羽撃の元に送ってやった。羽撃はそれを拾い上げ、

「ありがとう、森羅」

それだけ言うと、一八〇度反転して一目散にどこかへ行ってしまう。

「さて」

屈んだ状態だった森羅は、そのまま犬のように四足でダッシュする。目的はもちろん、目の前にある布切れだ。

わくわくした顔でそれを摘み上げた森羅は、それを広げてみる。

赤と白という、ちょうど羽撃が着ていた巫女装束と同じ配色の縞模様のある

四角い、ただ四角いだけの布

「え………?」

だれがどう見ても、それはただのハンカチだった。
そう。擦りかえられていたのだ。

あの脱ぐ動作のときからすでに、羽撃は手の内に握りこんでいたこのハンカチをうまく脱いだように見せかけ、それを丸めて森羅に渡してきたのだった。

「………!!」

鬼の形相をして歯を食いしばる森羅の頬を、一筋の熱い雫が滑り落ちていく。

「っ

!!」

そして、彼の心底どうでもいい雄叫びが、森の中に響き、消えていった。

第一話 この世界の歴史

いまはこんなですが、みんな元気です

(後

どうも！

この作品から見始めた人は始めまして。『ANGEL』のほうから見てる人はお久しぶりです。

作者の松村ミサトです。

そんなこんなで自分の二作品目の小説です。基本は『ANGEL』のようにファンタジーですが、ここでは向こうでは少し影の薄めの機械や科学と言ったメカ的なものも出てきますので、皆様これからなにとぞよろしく願います。

こちらが初見の方も、『ANGEL』の方、よろしく願います。

『ANGEL その天使、凶暴につき』
<http://ncode.syosetu.com/n6796g/>

意見や感想などがありましたらお気軽にしてください。

それでは、また次回。

第二話 自由こそが生き様な人たち

どこかから獣のような悲痛な叫び声が森にこだましている。

そんな中で、喜世子は背負っていた銃剣両用武装^{デバイス}「デイバيب」コンダクター』を脇に抱えるようにし、木にもたれかかって静かに眠るように目を閉じていた。

その姿はまるで無防備で、まるでピクニックにでも来ているかのような穏やかな顔をしている。

しばらくすると、喜世子は薄く目を開ける。

「来たわね」

そう言った直後、彼女の頭上から突如として雷が落ちてきた。

喜世子はそれを文字通り目にも留まらぬ速さで前方に移動し、直撃を避ける。落ちてきた雷は木の幹に直撃し、その部分から木を真っ二つにしてしまう。

喜世子はそれを見つめながらデイバيب・コンダクターを背負い直し、辺りを見回した。

「やっぱあたし狙いか。しかし一番槍をエル君が務めるとはね」

「外したっ！ 間髪いれずに二番槍、棗くんっ！！」

そんな声が数十メートル先から聞こえてきたとき、そちらに気を取られて声のした方に向いた喜世子の真逆から、弾丸のようなスピードで飛来してくる人影があった。

その人影、棗影明^{かげあき}は自身の手甲型武装^{デバイス}「クリスタル・ブレイク」を展開させ、すでに入力してある高速移動型身体強化術式^{シユトルム}「過速」を起動し、さらに残像を消すほど加速をつけ、右拳を振り上げ、思い切り喜世子の後頭部目掛けて振り下ろす。

「もらったーーーーー！！」

こうしたら死にそうだな、などという配慮は無い。この程度で死

なないことを熟知した上で、棗は殺す気でさらに拳に力を込めた。

「なーにをもらったってー！ー！ー！」

しかし喜世子はディバイブ・コンダクターを鞘から少しだけ抜き、その抜き身なつた刃の部分で自身の後頭部に振り下ろされた拳を受け止めた。

「クソっ！！」

「その形の奇襲なら、あと十倍以上は速くなりなさい！！」

「物理的に不可能っばいですが、善処します！！」

そう言った棗の顔面に喜世子の回し蹴りが入り、棗は数メートル近く吹っ飛ばされる。

「あらっ？」

軸にしていた左足首に違和感を感じた喜世子が下を見ると、彼女の足下にはいつの間にか水溜りが出来上がっている。

そしてその水溜りから水でできた手が伸び、彼女の足首を掴んでいた。

「あら、糸祢いとね。大丈夫だった、頭？」

「そう思うんならジャーマンなんかかけんな！！」

そう激怒した水溜り、糸祢は、掴んだ喜世子の足を振り回し、何処へともなく投げつける。

喜世子は空中でクルクルと回りながら体勢を立て直し、投げられた方にあつた木の幹を蹴って軽く飛び上がり、フワツ、と、軽く着地する。

するとその背後から、周りの木々を切り倒し、一本が二メートル以上もある巨大な大剣を二本持った蝶薙ちやうなげアクエリアスが突っ込んできた。

「ふおおおおおおおお！！！」

雄叫びと共に二本の大剣を振り下ろすが、喜世子はディバイブ・コンダクターを背中から下ろし、鞘に収めたままそれを受け、その反動で後ろに飛ぶ。

「来たわね、チョンマゲ！」

「チョンマゲじゃない！ 蝶薙アクエリアスだ！！」

「そう言われたくなきゃ、その髪型やめるか、婿入りして苗字変えなさい！！」

吹き飛んでいく喜世子を追うアクエリアスの眼前に電子画面が展開され、その中に記載されていたアイコンを数個選択し、それらを展開する。

すると彼の背中の部分に、後光のように円を描く形で小ささまざまな刀剣が出現した。

「だああありゃああああアアアアアア！！」

小ささまざまな刀剣を、時には速さ重視で短いものに変え、またある時は威力重視で長大なものへと次々に切り替えながら、高速で喜世子と切り結ぶ。

しかし、喜世子は顔色一つ変えずにそれらをいなす。しかもダイバンプ・コンダクターは一度も鞘から抜いてはいない。

「武器が多けりゃ勝てるって訳じゃないわよ。使えるのは二個までなんだから」

「常識に凶とらわれたら、その時点で負けるぞ！」

すると、背面に展開していた刀剣が一斉に喜世子の方に向かってその切っ先を向ける。

アクエリアスは展開していた電子画面に映っている『フルバースト射出』を迷わず選択した。

「いけええええええ！！」

ちょうど鐳迫り合いの状態に持ち込んだところで、喜世子目掛け一斉に刀剣が射出される。

「歯が溶けるほど甘いつ！！」

そう言った喜世子の眼前にも電子画面が現れている。彼女はそこに映し出されたいくつものウィンドウを一瞬で処理しきるとダイバンプ・コンダクターをガン・モードに切り替える。そして自らが引く形で鐳迫り合いから抜け出し、銃口をアクエリアスに向け、引き金を引く。

射出された散弾型の光線は目の前にいたアクエリアスごと自分に向かつてきていた武器を弾き飛ばした。

「ぐふおああ!!」

彼は後ろにゴロゴロと転がっていき、その跡を追うように弾かれた武器が落ちていく。そしてアクエリアスの鉄鋼機構スチールフレームが防御エネルギー残量0を示し、彼は脱落となった。

「勇猛果敢は良いことだけど、ちょーっと考えが浅かったわね。ま、あんたに当たる分の弾たまはエネルギー調節しといたから大丈夫でしょ」

喜世子はガン・モードのデイバイブ・コンダクターをガシヤツ!とポンプアップする。そこから高エネルギー圧縮札「ライト・カード」が飛び出し、役目を果たしたことで空中で燃え尽きて消えていった。

「く・・・くそ・・・」

喜世子の読みどおり、アクエリアスは弾が当たった胸部を押さえて立ち上がった。賞賛の声をかけようと喜世子が彼の方を見ると、その口元が薄く笑っていることに気付く。

反射的に、彼女は三メートルほど跳躍した。

そこに金属製の重たい拳が振り下ろされて地面を砕く。土が舞い上がり、地面にクレーターが出来上がった。

「やるじゃない系祢!」

喜世子は下にいる系祢を見る。

そこにいた系祢の身体はさっきの液体状とは打って変わり、体中が金属に変換され、ピカピカと光を反射して輝いていた。

「まだまだまだアー!!!」

系祢は下半身を液体に変換し、水流を地面に噴射して重たい金属製の上半身を空に打ち上げる。

その勢いを保ったまま、空中にいる喜世子に向かつて拳を突き出す。

「あら」

喜世子はそれをデイバイブ・コンダクターで受け流す。その反動

で重心がずれ、彼女の身体は落下していく形になる。

糸祢の目がキラリと輝いた。

「これを待っていたー!!!」

糸祢は身体を全て金属に変換し、空中で身動きが取れずにただ落下していくだけの喜世子目掛けてその重い身体で落下していく。

「ウリイイイアアアッー！ ぶつつぶれよオオッー!!」

「そんなどこぞの吸血鬼みたいなセリフを吐くと 大失敗

犯すわよ!!!」

喜世子はガン・モードのデイバンプ・コンダクターを自分の真横に向け、バンツ！ と。何も無い空間に発砲した。それだけで彼女の身体は反作用の法則で発砲したのとは逆方向に飛んでいった。

「あらアツ!?!」

糸祢は喜世子のすぐ隣を通り抜け、そのまま地面に派手に墜落する。第二のクレーターの中心で、人型にできた窪みの中に埋まってしまったっていた。

そのすぐ脇に、喜世子はスタツ、と着地する。

「あんまりスマートな戦法じゃないわね。応用の利く技なんだから、もうちょつと攻撃バリエーションの可能性を見つけてみなさい」

クレーターの中心に向かって教師らしくアドバイスを出し、喜世子はそのまま背を向けて立ち去っていつてしまった。

アクエリアスは遠くからクレーターに向かって、

「大丈夫かアー！ー！」

と、声をかけてやった。すると窪みから上体だけを起こした糸祢が、

「くっそ……! あの胸なしめ……」

と呟いた。

ガシャンッー!!

ポンプアップの音と同時に、彼の後頭部に硬い銃口が押し付けら

れた。

それと同時に、金属変換から元の身体に戻っていた糸祢の体中から冷たい脂汗あぶらあせが雑巾を絞ったみたいに流れ出した。

「どんな気分？ 糸祢……」

その問いかけに、糸祢はまるで時間が止まったかのように固まって答えられない。

そんな彼を無視して、喜世子は言葉を続ける。

「動けないのに背後から近づかれる気分ってのはたとえと……戦いに負けて見逃してもらった男が……負かされた相手の聴力も考えずに悪口を言っただけで多少なりとも自分の中の鬱憤うつげんを晴らそうとした瞬間！ ギイッ」

喜世子は銃口をより強く押し付ける。

「……と、動けない男の後頭部に銃口を押し付けられてる気分に似ているってのは……どうかかな？」

「それ今の状況を普通に説明しただけ……」

やっと搾り出したかすれた声は、しかし喜世子の心を動かさない。彼女は小さく、

「そう……」

と、呟いて、ディバイブ・コンダクターを何回もポンプアップする。

ディバイブ・コンダクターは普通のショットガンと違い、ポンプアップするほどライト・カードからエネルギーを抽出して、威力や一度の射撃回数を増すことができるのだ。

ガシャッガシャッガシャッ！

ブレスチャー

徐々に近づいてくる地獄の重圧に耐えられず、糸祢は友人に助けを求め。

「助けてー！ー！ー！！ アクエリアスー！ー！ー！！」

「あっ、アクエリアスならさつき『脱落したから自分は何も関係ありません』ってすごい速さでどっか行っただわよ」

「チクシヨー！ー！ー！！」

ガシヤツガシヤツガシヤツガシヤツ！

そんな話を続けながらも、ポンプアップの手は一向に休まらない。
「私はね、これでもこはあるのよ」

そして喜世子がぐずり出した糸祢に向かって言葉をつむぐ。

「でもね、教室にいる生徒が私より大きいから私の小さく見えるの。だからけして私が小さいわけではないの。分かる？」

「分かります！ 分かりましたから助けてください！！」

ギヤーギヤー喚く糸祢を見下ろしながら、喜世子はポンプアップの手をピタリと止めた。

「そう、分かったのね」

糸祢は何回も何回も肯定のために首を縦に振る。

「でも、もう遅い」

喜世子はニッコリと笑ったまま、引き金を引いた。

「ッ ！ いやだアアアアアアアア！！」

チュドーンッ！！

大地を揺るがすほどの大爆発が起きてから数秒経ち、煙が晴れたそこには、鉄鋼機構で相殺しきれなかった余剰エネルギーで黒焦げスチール・フレームになっそうさいている糸祢と、それを見下ろす喜世子だった。

「糸祢。あんたの敗因はたったひとつ……たったひとつの単純な答えよ……」

そう言っシンプルて喜世子は気絶した糸祢に背を向ける。

「『あんたは私を怒らせた』」

それだけ言っシンプルて、彼女は歩み去っていった。

「本当にあれでよかったのか？」

アクエリアスは逃走中に合流した棗とエル君に声をかける。

エル君は自分の目の前に四面ものコマンドスクリーンを展開し、四つのキーボードを休みなく打ち続けている。それを棗が肩車をして運びながら、アクエリアスと並走している形だった。

「仕方ないよ。あの状態になった喜世子先生には何を言っても無駄さ」

「でも、俺は鉄鋼機構スチール・フレームが解除されてて無理でも、棗なら止めに入れたんじゃ・・・」

「アクエリアス。お前は俺が全裸にオリブオイル塗りたくってライオンの檻おりの中に入っていくような馬鹿に見えるのか？」

「ライオンがオリブオイル漬けに喜んでくれるかどうかは知らんが、確かに状況的には似たような感じだな」

アクエリアスは納得しているが、しかしどこか腑に落ちないような微妙な表情をしている。

そんな彼を慰めようと思い、エル君は口を開く。

「まあ、死して屍拾うもの無し、って言うし」

「まだ死んでないぞ!？」

「あつ、そうか。まあ別にいいよ。どうせあの状況からの救助なんて死亡届出した後の電気ショックぐらい意味が無い」

「エル・・・相変わらず顔に似合わずえげつないな・・・」

「そんなことより、作戦を第二段階に移そう」

エル君は忙しそうなふりでキーを叩きながら、第二段階への準備を進めるのだった。

「さーって、と」

しばらく森を探索していた喜世子は、かれこれ三十分は誰も攻めてこないの、この間使シグ俱に入力したばかりの『世界の銘酒丸分

リブック』というアプリを見ながら暇を潰していた。

使俱はこの世界の人間が必ず持つ高純度情報圧縮型端末であり、これによって連絡を取り合ったり電子画面の展開、さらには戦闘用術式を使う者にとってはそれらを入力・発動までが可能になる。ちなみに喜世子の使俱は狛犬型で、名前を『あーちゃん』という。狛犬の阿形の方だからというのはいうまでも無い。

「あいつら、もしかして全員で潰しあう方に切り替えたのかな？」
イギリス原産の、一本が自分の給料三カ月分もするワインのペー
ジを眺めながら、ふと、寂しいような感じになる。

今日はこのようなルールになったが、実際なら教師は実習が終わるまでは特に何もせず、生徒達が戦闘を行っているエリアで監督を行わなければいけない。

他の教師なら本を読んだりして時間を潰すのだが、生憎ながら喜世子は大抵の本は読み飽きてしまっている。かといって寝たりすると、何の用も無いくせに気まぐれに『見学しに来た』などという校長と鉢合わせて小言を言われたりする。それを差し引いても、彼女のクラスには放っておくと授業を抜け出して女子更衣室に行こうとする森羅がいるので、寝たりしてその馬鹿が新聞に載るような事態を避けるため寝ることなど出来ないのだ、ぶっちゃけ戦育の授業中は喜世子にとっては拷問級に退屈なのだ。

だから今日は喜世子にとっては非常に楽しめる時間になるはずだったのだが、相手が攻めてきてくれなければ神経を使う分、こちらの方が退屈且つ疲れてしまうのだ。

「まあ、でも」

喜世子はアプリ画面を閉じ、

「ウチの生徒はそう簡単に退屈にはさせてくれないわよね」

瞬間、喜世子は右に勢いよく飛んだ。

そして、それとほぼ同時に、さっきまで喜世子がいた場所を高速で何かが突っ切っていく。

それは数メートルほど先で大きくドリフトして、喜世子の方に向

き直る。

一枚の鋼鉄製の板、サーフボードのような形状をしたそれは、搭乗機型武装『デバイス・パルス・ウェーブ』だ。

それに乗っているのは、その持ち主であるいかにもそこらにいるストリートボーイのようなファツシヨンのノリエル「シーゲット」。

それともう一人。一見すれば浅黒く見える濃い赤銅色の肌をして、額にはサイのように皮膚に包まれた二本の短い角が生えている、鬼族の間切丸だ。

「あら、ノリエルとキリちゃん。今度の相手はあんた達？」

喜世子はデバイス・コンダクターの柄を掴み、臨戦態勢をとる。それを見ると、ノリエルと切丸は表情を硬くした。

「行くよ、切丸くん。しっかりね」

「まかしとけ、ノリエル」

それだけ言うと、切丸はボードの上から降り、ノリエルだけが喜世子目掛けて突っ込んでいく。

突っ込んでいく途中で、パルス・ウェーブは刃となっている両端の部分がガシャツと音を立てて開き、底から発生した青い光の粒子で刃がコーティングされた。それにより両端部の切れ味はさらに威力を増す。

喜世子は背中から武装を下ろして構える。ノリエルはさらに速さを増して突っ込んでいく。

が、予想だにしないことが起きた。

いきなりノリエルが大きく喜世子の頭上をまたぐように進路を変えたのだ。

そして彼が上に移動したことにより、ノリエルの後ろにいた切丸の姿が見えるようになる。

切丸は自分の身長ほどはある金棒型の武装を野球のバツターのよつに構え、そして、

「『衝々撃々崩々打』ッ！！」

思いつ切り、それを振り切った。喜世子はそれを見てとっさに自

分の前に武装を防御体勢で構えた。

すると、ドンッ！！と。喜世子の身体が数メートルほど後ろに吹き飛ばされる。

切丸の金棒が通った軌道上から、とてつもない速度で複数の衝撃波が飛んで来たのだ。

さらに飛んでいる喜世子目掛け、上空に移動していたノリエルがボードからビームを発射してくる。喜世子はそれを全てデイバイブ・コンダクターで弾き落としながら、地面にすべるように着地した。

彼女は自分の鉄鋼機構スチール・フレームの損傷度合いを見るが、対衝撃防御が完璧であったため、まだ防御エネルギーは無傷の状態だった。

「いやー、今のは危なかったな。先生ちよつとヒヤッてしたよ」

素直な感想だ。てつきりノリエルが波状攻撃でも仕掛け、それを援護として一撃必殺としての威力が高い切丸が攻撃を至近距離で当ててくると、二人に遭遇した瞬間に予測していた喜世子にとっては、まさしく最初からその考えを覆されたのだから。

「いやはや、成長したね二人とも。去年とはだんちの戦術に、先生は嬉しいぞ」

「そりやどうも！」

ノリエルはボードの端を左手で掴み、ひっくり返るほど後ろに体重をかけて旋回すると、再び喜世子目掛け突っ込んでいく。その途中、使シグ俱グにアクセスすると、その中から取って置きの式を選択し、起動する。

バツ！！と。いきなりボード両端に展開されていた青い粒子が矢印の先端のように巨大になる。ボードを掴んだままの体勢のノリエルがそのまま身体を捻ると、ボードはそのままコマのように高速回転し始める。

「一気に決めるよ！ これ十秒以上は耐えられないから」

「あら、時間制限付きの技？ その分強力なのかしら」

「違う！ 酔っ！！」

弱点を堂々と告白しながら突っ込んでくるノリエルを警戒しながら

ら、喜世子は後ろにいる切丸にも注意を向ける。彼は相変わらず金棒をバットのようにつまみ、遠距離からの攻撃に徹するようだ。

そして、ついにノリエルが喜世子を射程内部に捉える。

「『アイス・ダスト
氷滑斬』!!!」

その名のとおり、青い粒子が削られた氷の粒を連想させる幻想的な攻撃が前方から飛来し、

「『しんしんへき
震々壁』!!!」

後方からは金棒を振るって発生した衝撃波が壁のように一面を制圧しながら向かってくる。

さてどうするかと喜世子はコンマ一秒以内で思考を回転させ、すぐに行動に移る。勢いよく地面を蹴ると、そのままノリエルのほうに向かって疾走していく。

そして鞘に収めたままのデイバィブ・コンダクターを前方に構え、回転するノリエルの刃に接触させる。それと同時に、彼女は回転の流れに乗るようにそのまま左に向かって飛んだ。

バチィッ! と火花を散らせながら、自らも加えた力の勢いで喜世子は吹っ飛んでいく。予想以上に威力が強く、身体がグルグルと回転して視界が定まらない。今日は予想外な事が多いなと驚きながらも、生徒達の成長に少し嬉しく思う。

オエエエエエエ!!! と、ノリエルのえずく声が聞こえてくる。ところを思うに、もうあの技自体は停止しているのだろう。あんなもの使うのならもうちょっと三半規管を鍛えろと後で説教してやらねばと思う。

徐々に視界が定まると、地面に鞘ごとデイバィブ・コンダクターを突き刺し、無理矢理勢いを殺して停止する。

すぐに二人の方に目を向けると、

「ヒィィアッハアアアアア!!!」

さっきまでえさきまくっていたノリエルは、先ほど切丸が発生させた衝撃波の壁の上を波乗りしていた。

「最高のビックウエーブだ!!!」

その声に満足するように、上機嫌になった切丸はどんどん同じように衝撃波を発生させ、波を強くしていく。

「コラー、授業中に遊んでんじゃない！ 遊ぶんなら先生も混ぜるー！」

すぐに武装を背中に担ぎ直し、教師にあるまじき注意をする。

「止めたければこつちに来てくださいよ先生。でも、来たら多分負けますよ」

そのあからさまな挑発にカチンと来た喜世子は、ありや一発シメてやるか、と物騒なことを思いながら、拳を二、三度握ったり開いたりすると、遊んでいる生徒二人に向け、鉄拳制裁のために地面を蹴って走り出した。

「今だ！ イコル君、ゼンオー君、伸太君！！」

それを待っていたかのように、ノリエルが大声で叫ぶ。それを合図に、近くの木々の間や草むらから三つの影が、喜世子の前に立ち塞がるように出てきた。

出てきたのは、大柄で目つきは悪いが実は優しい竜人族のイコルドラゴニア、銀色の長い髪に八重歯と童顔が素敵な人狼族の双海ゼンオーウルフェル。そして色黒でラテン系の吸血鬼、飯仲尾伸太いいなかおしんただ。彼らは後ろにいる切丸も含め、クラスでは魔族男子四人組と呼ばれている。

「行くぞ！ 気を引き締めていけよ貴様ら！！」

「行くぞ行くぞ行くぞおー！ 行っちゃうぞー！」

「さあつて、行くとしますかね」

イコル、ゼンオー、伸太はそれぞれが三方向から取り囲むように喜世子に向かってくる。

「ウアガアアアアアアア！！」

その途中、イコルとゼンオーは自らの細胞を活性化させる。彼らの身体が発光し、その形が変わっていき、光が砕け散るように消え

去ったときには、イコルは堅牢な鱗の肌と巨大な翼を持つ竜の姿に。ゼンオーは銀の毛並みが美しい巨大な狼の姿に変身していた。

「切り捨て御免!!!」

イコルの鋭利な爪を持つ巨大な腕が喜世子目掛け振り下ろされる。しかし、喜世子はそれを真つ向から拳で受け止めた。ぶつかり合った拳同士から腹の底に響くような重低音が響く。

「しまつ　　ッ!!!　　唯技か!!!」

「鍛えが足りんわあー!!!」

喜世子はそのままイコルの腕を掴むと、インヲアヒキルミステイ・タイラント唯技・『神秘力豪』を使い、思い切り振り回す。

インヲアヒキルデジタ・マキカ唯技とは機械魔術で言うところの奥義であり、その名の通りその者が持つ唯一無二の魔術式のことである。

喜世子が使用している『ミステイ・タイラント神秘力豪』は簡単に言えば身体能力の術式だが、同系列の能力、すなわち『筋力強化特化型』『速度強化特化型』『頑強性強化特化型』全ての特性を兼ね備えた珍しい術である。

イコルは竜巻よろしくぶんぶんと振り回され、喜世子に攻撃を加えようと突っ込んできていたゼンオーをそのまま弾き飛ばす役割を担ってしまっていた。

「ギャヒイーンッ!!!」

その姿通り犬みたいな鳴き声を上げ、ゼンオーは地面を転がる。

「おい、大丈夫か?」

「平気だい!」

ゼンオーは起き上がり、かぶり頭を振って気合を入れなおす。

「おい、シンちゃん。今からでもスーパーマード使え!　今の状態じゃ先生に勝てないぞ!」

「い、嫌に決まってる!」

伸太は慌てて首を振る。

「男の血なんか使ってスーパァー・シンちゃんになるのなんて真つ平ごめんだっつもの!!!」

「この際我慢しろ！ 見る。イコル君あのままだと空飛べそうなくらい回されてるぞ。あの女人間じゃないぞ。化物並に凶暴すぎるぞ」
「嫌なモンは嫌なんだよ！」

イコルが涙目になってハンマー投げのハンマーみたいに放り投げられたが、それでも伸太は首を縦に振らない。

ゼンオーは焦りながら、

「わ、分かったぞ。なら俺が女つばい髪型になるから、それで頑張つて！ 何がいい！？ ポニーテール！？ それとも三つ編みおさげにするか！？ 俺的にはポニーテールの方がいいんだけど、この長さなら中華風のシニヨンにもできるぞ！ でもやつぱりお勧めはポニーテールで――」

「ポニーテール推しすぎだろ！ いくらお前が長髪で女つばい童顔だからって言つてもな、例えばウンコをカレーだと思つて食べる奴はいねえだろ！！」

「お前にとつて男俺らつてウンコと同列なのか！？」

伸太の発現に酷くショックを受けたゼンオーだったが、次の瞬間再び喜世子に向かつていつて敢え無く左フックで返り討ちになったイコルに巻き込まれる形で吹っ飛んでいった。『キユツ』という断末魔のような小さな声が、すぐ隣にいた伸太の耳に残った。

ダメージ過多でリタイアとなった二人は変身も解け、小柄なゼンオーの上に大柄なイコルがのしかかっているという最悪な形で地面にのびていた。

それに一瞬目を奪われていた伸太が慌てて視線を前方に戻すと、いつの間にか距離を詰めていた死神が笑顔で目の前に迫っていた。

「次はお前かぁー！！！！！！」

「やつぱなつときゃよかつたぁー！！！！！！」

後悔を言う口はこの口か！ と言わんばかりに放たれた喜世子の拳は真つ直ぐ伸太の顔面に突き刺さり、そのまま折り重なつて山になつている失格者組の二人の所にふっ飛ばし、見事頂上にもう一つの屍しかばねを築き上げた。

「ふうー。先生スツキリ！」

額の汗を爽やかに拭い、喜世子は邪悪な笑顔で残りの二人に向き直る。

ノリエルはその顔を見て本気で『あ、終わった・・・』と思ってしまう。

「ノリ！ もう大丈夫だ、行けるぞ！！」

しかし下から聞こえてきた切丸の声に何とか正気を取り戻す。ノリエルはすぐにパルス・ウェーブに蓄積されたエネルギー量を確認する。

今までアホのように切丸の発生させてきた衝撃波に乗り、全て受けきってきたのは、それをエネルギーとしてパルス・ウェーブの推進力と攻撃力を跳ね上げるこの荒技を使うためだ。実家の整備工場で改造し、容量を五倍以上にしたエネルギータンクはすでに満タンになっていた。

「ありがとう切丸君！ これで今日は半ドン決定だ！！」

ノリエルは画面に展開されたロックオンカーソルを慎重に合わせしていく。しかしそれをさせまいと、喜世子は身体能力を強化したままこちらに向かって突っ込んできた。その速度は速く、おそらくもう数秒でこちらに接触できるだろう。

しかしノリエルは慌てない。ただ必死に意識を集中し、ロックできるタイミングを見定める。下から切丸が不安げな視線を送っているのが分かるが、それでも焦らない。むしろそれを糧により一層集中する。

そして距離が十メートルを切った時点で、カーソルが完全に喜世子を捕らえた。

「行っけええええええ！！」

ノリエルは推進力を最大値に上げ、パルス・ウェーブを射出した。轟ッ！！ と巨大な音を立てながら空気を切り裂き、コンマ一秒足

らずで喜世子の目と鼻の先程の距離に詰め寄る。両端部の刃は今はい実体剣に戻してあるが、それは切丸から供給された振動をそのまま開放し、超々高周波振動ブレードへと変貌を遂げている。触れればいくら身体強化術式を展開しているとはいえダメージは必至だ。それはこのまま行けば喜世子の喉元に直撃するコースを進んでいる。

そしてその距離が数センチにまで迫った途端、喜世子はほんの少しだけ身体の心をずらし、そのコースから外れようとする。

ノリエルは高機動下での反応支援術式でそれを確認すると、ボードを回転させ、回転力で威力を上げた一撃を叩き込もうと重心を低くした。

しかしそれがまずかった。重心を低くするときに必然的に低くなる頭部、顔面に、喜世子の突き出した拳が思い切り突き刺さった。

自らの速度も相成って高威力のカウンターを喰らう形になったノリエルの身体は喜世子の腕一本で遮られ、その衝撃でパルス・ウェーブはノリエルの脚を離れて制御を失い、木々を薙ぎ倒しながらどこへともなく飛んで行ってしまった。

「触れられないんだったら、触れられるところを叩くのみ。ダメよ、絶対的優位なときでも気を抜いちゃ」

そのアドバイスはすでに気を失い、防御エネルギーも切れて脱落したノリエルには届かない。喜世子は鼻血を出しているノリエルをそっと地面に寝かせてやる。こういうちよつとした優しさが、傍若無人な彼女が生徒達に慕われている理由でもある。

さて、と後ろを振り向いてみると、一目散に自分に背を向けて走る切丸が目映った。

喜世子の眼光がキラリと怪しい輝きを見せ、驚くほどの跳躍で十メートル以上距離が離れていた切丸の上に着地し、すぐにマウンットの体勢をとる。

パニックであうあうと言葉にならない声を上げていた切丸は、喜世子が顔面に放った一撃で、すぐに静かになつて動かなくなった。

「やられたアーーーーー!!!」

スクウェア・フォーエス

魔界男子四人組とノリエル組の戦闘を遠距離から観察していたエル君は頭をボリボリとかきむしりながら叫ぶ。

「おい、どうなってる。ノリエルの新技があれば何とかなるんじゃないのか、エル」

その光景をエル君の使シク俱から転送された画面で見ていたアクエリアスがあきれたように言った。

「途中までは良かったよ。でも甘く見すぎてた。まさかあそこで『ハイド・コマンド デュアルリンク 鋭加神経』と多重唯技できるなんて……。完全に僕の読み違いだ」

デジタ・マキカ スキル 機械魔術で唯技を二つ以上同時に発動する技術を多重唯技と呼ぶ。

ノリエルの一撃が当たる一瞬、喜世子の反応なら避けることまでは可能であるとはエル君はふんでいた。だが計算違いだったのは、喜世子がああのタイミングで自身の持つもう一つの唯技スキル、ハイド・コマンド 感覚神経を鋭敏化させ、反応速度を数段階以上に上げる『ハイド・コマンド 鋭加神経』をあの土壇場で発動させたことだった。

ハイド・コマンド 感覚を跳ね上げる鋭加神経と身体能力を向上させる神秘力豪。こ

ミスティ・タイラント

れほど相性のいい技同士は無い。なにせ鋭加神経で向上した反応に神秘力豪で強化された身体能力が加われれば、一メートル以内の距離で撃たれた弾丸など簡単に叩き落とすことが出来るからだ。実際に酒に酔った喜世子が繁華街のチンピラともめてその荒技を使ったことがあるのを、クラスの人間なら誰でも知っている。

「っていつか、リョーヘイ君やマキちゃんには制御チップ渡しておきながら自分は一切加減してないよ！ さてはあの暴力女、初めから約束する気無かったな。くっそ……。理事長に今までの非道の数々を暴露してやるうか」

エル君が今までの喜世子の暴拳の数々を脳内で箇条書きにして整理していると、近くの茂みがかさがさと揺れ、中からいつも何を考えているか分からない棗影明の仏頂面が顔を出した。

「いや、そうでもないぞ。喜吉きよし先生が本気を出したら、開始三分で決着が付いている」

茂みからのそのそと体を出しながら棗がエル君をなだめる。彼はエル君に言われた次の作戦の仕込みが終わり、今帰ってきたところだった。

「分かってるよそんなことくらい。まったく、あのチート性能は本当に厄介だよ」

棗の方を見もせずに、エル君はイライラしながらキーボードを叩く。

「あと残ってるメンバーは森羅君を抜いて八人。せめて欠席してる四人がいれば戦況も変わったんだろうけどなあ。獅子しし緒さんがいればなあ」

「まあ、今残ってるのはほとんど女子だし、戦闘向きは羽撃とアンナしかない。エルも直接戦闘は無理だし、まともに戦えるのは六人。あの怪物教師を相手にするには心許こころもとないな」

木にもたれかかりながら、直接戦闘を行う側の五人に入っているアクエリアスがハア・・と大きく息をつく。彼は今現在自分が使える武器をチエックしていたところだったが、さっきの戦闘に全力を注ぎすぎたせいではとんどろくな物が残っていなかった。それが原因でもう一つ、大きなため息が出た。

「一番いいことを言えば、森羅が何とかこちらの軍勢に加わってくればいいんだけど」

「俺がどうしたって？」

「だから森羅を仲間に引き込めれば　　って、うわああ!？」
とっさにアクエリアスはその場から飛び退く。

見ると彼が今まで寄りかかっていた木の枝に、森羅が逆さまになってぶら下がっていた。膝の裏で木に引っかかりながらいつものヘラヘラとした表情をしている。

「し、森羅!？」

「そつだよ、森羅だよ」

勢いをつけ、くるんと一回転して森羅は地面に着地する。それを見て三人は後ろに数歩下がった。

「んだよ、どうした？ 何そんなに怖がってたんだよ？」

「お前、一時間も経ってないのにもう俺らにしたこと忘れたのか・
」

アクエリアスは呆れたように言いながら、いつでも武器を展開できる体勢を取っていた。棗はすでにクリスタル・ブレイクを展開し、エル君も逃げるための準備をしている。

「つて、おい！！ 何お前だけ逃げようとしてる！！」

「エル君！ ここに来てそれは無いと俺も思うぞ！」

「無理だよ！ 僕が真つ向勝負で森羅に勝てるわけ無いだろ！？」

だから二人の邪魔にならないようにここは撤退を

「させるか！」

アクエリアスと棗は一斉にエル君に飛び掛り、押さえ込む。もともと小柄な上に戦闘向きではないエル君は、体格のいい二人に押しつぶされて簡単に無力化された。

「は、離せー！」

「誰が離すか！」

「死ぬときは一緒だ。エル君！」

男三人がギヤースカと喚いているうちに、森羅は三人下に歩み寄っていく。

「おいおい。何勘違いしてんだ？ 俺がいつお前らと戦うなんて言
つたよ」

「えっ？」「」

その言葉に、本気で嬉しそうな声を出す三人。

「ほ、本当に戦う気はないの？」

「ああ」

森羅は拳を胸の前で合わせて上下に擦る。そうすると、彼の拳にオレンジ色に発光し、それとまったく同じ色の炎が発生した。

「俺は単純に、みんなを無力化しに来ただけだから」

その声はまったくいつものトーンであったはずなのに、なぜか三人には地獄の底から自分達を呼ぶ亡者の声に聞こえた。

「っていうかいつの間にテンションがそこまで　　！」

「馬っ鹿だなあ。二段階までなら女の子のパンチラ妄想しただけでもいけるんだって」

エル君の疑問にニコニコ顔で答えながら、森羅は腕を振り上げた。

「三人ならやつぱ、こんくらい威力ないとな」

「こんのおーーーーー！！」

半ばやけくそのようにアクエリアスが二本の長剣を召喚し、森羅に向かって飛び掛っていった。

しかし森羅は別段驚きもせず、ただ一言、

「『^{とうえん}橙炎』」

技名を言い、思いつきり突っ込んできたアクエリアスに拳を叩き込む。喰らったアクエリアスはオレンジ色の炎を纏ったまま棗とエル君の所に吹っ飛び、盛大に爆発した。

爆煙が晴れて現れたのは、黒焦げになり防御エネルギーが切れて動けなくなった三人だけだった。

「いやー、これで残ってるのは五人か」

森羅は額を拭い、からからと笑いながら他のメンバーを探しにどこかへ行ってしまった。その姿はまるで悪びれた様子も無く、むしろ清々しくさえもあった。

「あの・・・や、ろう・・・」

「虚しい・・・」

「くや・・・し・・・」

最後の力を振り絞って言葉を残した後、三人は揃って気絶した。

蝶薙アクエリアス、棗影明、エルⅡエル、^{リタイア}脱落。

残り六人（欠席四名）。

少女は街に到達した。

基本的に街と森の境目である外周部には結界が張ってあるのだが、悟神族以外のものならば簡単に通過することが出来る。

しかしそこには同時に小さな門ゲートがあり、数台のカメラが侵入者に対して常に目を見張らせている。少女は今の形式となった国家に属していないためこの街、『関東』には正式な形での入場を行うことが出来ない。

仕方が無いので、少女は軽く能力ちからを使うことにした。

彼女が軽く地面を蹴ると、一瞬でその身体はゲートを突破し、街の中に入ることに成功した。おそらくカメラには何かが写ったというのがばれているだろうが、画像を解析してもばれない自信があったため、少女は何食わぬ顔でその場を離れる。

少女は人込みを縫うように進み、目的の場所を見つけた。少し古ぼけた感じのするその建物の中に、何のためらいも無く足を踏み入れる。

そこには、一人の女性が笑顔で立っていた。愛嬌の溢れた丸っこい顔。見ているだけで人を和ませるような不思議な魅力がそこにはある。

少女はその女性の目を真っ直ぐ見て、言った。

「コロッケ十個下さい！」

「あいよ！」

女性、総菜屋『風見かぜみ』のおばちゃんは笑顔で返事をし、慣れた手つきで目の前にある大皿からコロッケを取り、僅か数秒足らずで少女に注文の品を手渡した。

「はい、十個で五百円ね」

「はい」

少女は嬉しそうな顔で代金を払い、嬉しそうな足取りで店から出

る。

早速手に持った袋からコロッケを一つ取り出しかじった。

カリカリと香ばしいころもに、中から溢れる芳醇なじゃがいもとひき肉のうまみに思わず頬に手を当ててしまう。冗談ではなくほったが落ちそうになったと少女には感じられた。

早々に一個目を食べ終わると二個目を取り出し、口に運ぶ。が、その手が途中で止まる。

少女の目は、前方にある地図看板、そこにある『関東区総合霊園』という場所に目が止まっていた。

そしてその顔が、少し悲しさを帯びたものになった。

「先に、行っておかないとね……」

そう言っただけで地図で道順を確認し、少女は霊園へと向かって歩いていく。

その足取りはどこか重く、どこか、儂げだった。

第二話 自由こそが生き様な人たち（後書き）

どうも！

まだ始めたばかりなので早めに投稿しようとしてたんですが、少し時間がかかってしまいました。申し訳ない。

次回はもうちょっと早めに最新話出したいと思います。質問、感想など随時待っていますのでお気軽にどうぞ。

それでは、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3643x/>

機械魔術の楔人

2011年11月1日02時08分発行